II　調査地の概観

1.　地形・地質

調査対象地の中心である塩嶺高原，および勝弦盆地は塩尻市と諏訪，岡谷市の間に位置し，標高800 m から約1,100 m までの高原，山地である。位置的には日本のほぼ中心部に位置するといわれ，中部地方のほぼ真中に位置する。

調査対象地の塩嶺高原は八ケ岳連峰から派生する高ボッチ山からの派生尾根であり，小野町を通る三州街道をはさんで西部の山塊は中央アルプスの北端部にあたる。

地質的には塩嶺高原の大部分は新第三紀の塩嶺累層群の凝灰角礫岩層，凝灰岩の狭み層，および大沢山（1,096 m）を中心に安山岩層が分布する。また勝弦峠の南東斜面部には一部泥質凝灰角礫岩層が分布している。

また塩嶺高原の北西部にあたる上西条の東部山地や三州街道をはさんで西部に位置する大芝山（1,212 m）や霧訪山（1,305 m）を含む山塊は粘板岩，砂岩，凝灰岩，石灰岩等から成る古生層地帯となっている。

小野川の支流の各沢や岡谷市側の天竜川にそそぐ小河川沿いでは第四紀沖積世の沖積層の堆積層が帯状にひろがっている。また勝弦盆地内の低地では一部第四紀洪積世の段丘堆積層が分布している。

2.　植　　生

調査対象地内の植生は比較的起伏の少ない山地，丘陵地の為，古くからほぼ全域にわたって土地利用がおこなわれており，そのほとんどが代償植生によって占められている。とくにアカマツ，カラマツ，一部スギ，ヒノキ等の針葉樹類の植林地として利用されている場所が多く，この地区の中心的景観要素となっている。とくにアカマツの植林が山地の尾根部を中心にもっとも広い面積を占め，谷部凹状地を中心にカラマツ（一部スギ）の

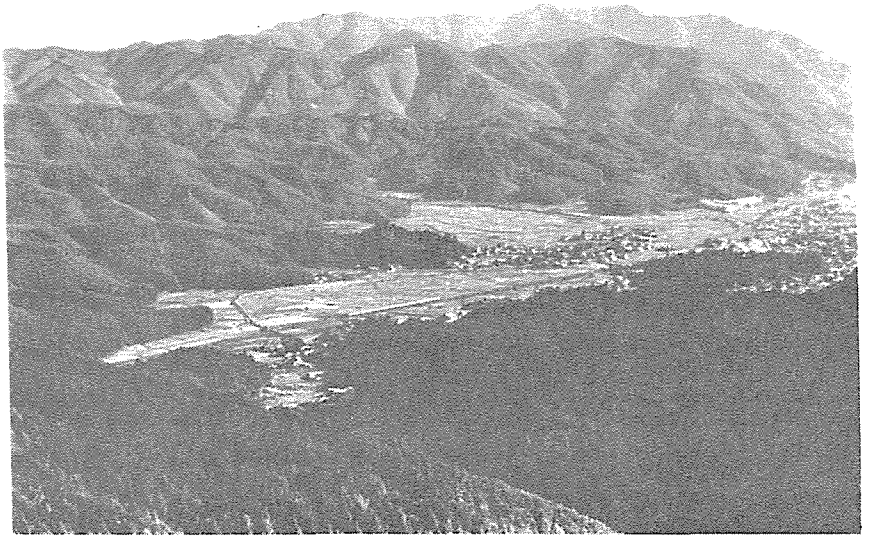
植林がおこなわれている。

山地斜面下部や山腹の一部にブロック状にコナラ，クリ，カスミザクラなどの夏緑広葉樹類を中心とした雑木林や，ケヤキ林なども見られるが，面積的にはきわめてかぎられている。これらの雑木林やケヤキ林はこの地域の丘陵，山腹部の自然の森林植生にもっとも近い植生と考えられていた。しかし，その大部分は若齢林や二次林であることが多く，人為的影響の強さがやはり影響している。北小野神社をはじめ各地の神社にはケヤキ，ミズナラ，あるいはモミ，ツガなどの大径木の生育が認められるが，いずれもスギなどの人工植栽木が多かったり，あるいは植生面積がきわめて狭く，林床が荒廃している場合が多い。

勝弦盆地内では勝弦部落を中心に野菜類を中心とした畑作地あるいは河川沿いを稲作水田として利用されている。最近では北東部では高原別荘地やゴルフ場として広大な面積を保養・レジャー用にも利用されはじめており，芝生，疎林などの開放景観がひろがっている。これらの文化景観域内の植物的景観構成要素としてはアカマツ，カラマツなどの単木的な植栽木や，シバ群落，雑草植物群落など低茎の草本植物群落が大半を占めている。

スギ，ヒノキ，カラマツ，アカマツなどの人工林の占める割合の大きな植林内やその周辺，あるいは森林伐採跡地では好陽地性のシナノザサが一面に繁茂している。また有刺バラ科植物のニガイチゴやクマイチゴなどが植林内にまで群生している植分が多い。勝弦峠，小野峠を含む山地（約1,000 m内外）の尾根の上部ではシナノザサに代ってミヤコザサが林床に群生しており，これらの尾根部に植林されているアカマツ，カラマツの生長は不良である。

各河川沿いの低地では，その大部分は水田，畑地として利用されているが，谷頭部に近い小面積の湿地や河川際にはアゼスゲ，カサスゲ，ヨシなどのヨシクラスの湿生草本植物群落や，ハンノキ林，さらに伏流水のにじみでている様な凹地ではヤマドリゼンマイ，オタカラコウ，ヒロハドジョウツナギなどの湿生草本植物群落が各地に小面積ながら点在し生育している。



Phot.1　アカマツ，カラマツの造林地で占められる山地景観